

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



黄河の名所、壺口瀑布。黄土色の水が激しく流れていく(6ページ参照)

Contents

対談～日中環境協力を語る	P 2
第8回会員総会報告	P 4
中国環境NGOツアー参加記	P 6
黄土高原に行って気づいたこと	P 6

2002.7

86

対談～日中環境協力を語る

明日香 壽川

&

高見 邦雄

(東北大学東北アジア研究センター助教授)

(GEN事務局長)

会員総会に先立っておこなわれた対談は、明日香壽川さんの自己紹介からはじまりました。あれもこれも欲張った内容になり、とてもすべてを網羅できませんが、要約してご紹介します。8月末までには、HPにもう少し詳しい内容を掲載する予定です。(文責・編集部)



化問題の今後を左右する大きな問題です。また、中国では炭鉱事故が多く、データによると年間約1万人が亡くなっています。炭鉱労働者は出稼ぎの農民、農村で農業ができなくなった人々です。農業ができなくなった原因は、土壌流出など自然破壊の問題や、温暖化という、人間の行動で自然が変化してしまったことあると思います。

中国はいま石炭の使用を減らしていますが、その結果石油や天然ガスをつかうことになります。それが世界にどう影響を与えるか。ご存知のように、食糧問題では中国が将来外国からたくさん食糧を輸入して世界が困るという話があります。実際、中国の環境問題も含めた食糧問題が世界に大きな影響を与える可能性は大きいと思います。そういう意味でも、みんな中国の問題を考えるべきです。

高見：いま日本では、中国は環境問題を全然真面目にやらないのに、日本が協力する必要はないという人が増えていますが、私は違うと思います。92年に緑化協力をはじめたころは、北京や大同で青年団の人たちに中国はこれから環境問題が大変だよと言うと、猛反発がかえってきました。それは先に豊かになった日本人の勝手な議論だ、中国は膨大な人口を食べさせることが最大の問題で、それには経済発展が第一だ、環境破壊が付随しても、あまんじて受け入れる、そんな主張でした。

ところがいま中国の環境への意識は大きく変わってきていると思います。

明日香：たとえば今年の春に、朱鎔基が中国のこれからという話を全国人民代表大会でした時に、30分ぐらいで8回、「生態系の保護」という言葉がでてきたそうです。ゴミや騒音など、身近な環境問題が目に見えるようになってきて、一般市民もなんとかしなくてはという人が多い。

それから、NGOができてつづきます。中国のNGOは政府のOKがいるので、反政府というのは表に出せない。だから政府と対立しない環境教育や啓蒙が多いようです。そうした環境NGOが、自分たちでお金を集めて10分ぐらいのテレビの環

境番組をつくるなど、日本よりすすんでいるところもあって、多くの日本人が思っているように、中国では環境意識が低いということはありません。

高見：レスター・ブラウンの「誰が中国を養うのか」のインパクトはすごかった。反発が多かったんですが、食糧と農業の問題を政策的にも考えないといけなという反応もありました。

さらに衝撃的だったのが、98年の長江・松花江の水害です。それまでも長江は毎年のように氾濫し、そのたびに100年に1度の大雨と言われた。ところが98年、おそらくはじめて、「これは人災である」と。上流であれだけ木を伐ったら大水害になるのは当たり前だという議論が、あそこで起こった気がします。

明日香：レスター・ブラウンが日本に来たとき、私は、講演会を企画したことがあります。そのとき、あの本に対して中国が非常に反感を示したけれどどう思いますかと聞きました。するとブラウンが答えたのは、あの本を出したときに中国政府から招待されて、北京で上層部と話し合った。1959～60年の、何千万人という餓死者がでた大躍進のころの経験をもつ人たちがいま中国のトップにいる。彼らにとって中国が食糧問題で大変なことになるといえるのはタブーで、私はそれを破ってしまった。それで反感を買ったのではないかと。その後、彼らは議論を重ねたし、中国もブラウンによっていろいろと考えさせられたでしょう。

長江の話ですが、歴史的に洪水は中国では日常茶飯事で、1900年とか1800年代には何万～何百万人が10年ごとに亡くなっていた。そういう意味では98年の洪水は、よくある話といえるでしょう。ですが、中国政府も真剣に対策をたてました。そのひとつが、上流での森林伐採禁止ですが、それが別の問題をおこしています。

いま中国は海外からたくさん木材を輸入しています。1番の木材輸入国は日本ですが、2番目が3番目が中国です。中国の環境が、日本もそうですが、まさに世界の環境に影響する、典型的な例だと思います。

明日香：私は日本で生まれましたが、両親は中国人です。昔は張といいましたが、92年に帰化と結婚を同時にしたときに妻と相談してつくったのが明日香という名前です。次の世代、新しい世代へ名前を残せたらいいなという願いをこめました。

今日は日本と中国の環境がテーマですが、私が日本で生まれた中国人として育ち、いま日本人として生きている、そんな視点から話したいと思います。

高見：いま中国は、変化が速いですね。欧米や日本が4、5世代かけてきたことを、1世代でやろうとしている。そこから出てきたひずみを感じて、GENの活動を思い立ったのですが、明日香さんが中国の環境問題に関心をもちたのはどういうことからですか。

明日香：私は日本の技術、特に公害対策の経験なり技術を中国にうまく移転していく仕組みがつかれないかということから、中国の環境問題に入りました。とはいえ、中国の環境問題は歴史的に根が深く、4000年の中国文明があるから現在の環境問題があるとも言えます。いまは確かにスピードが速い、さらに、非常に脆弱な生態系のうえにそれをすすめているのが中国の特徴であり、これからむずかしいところですよ。

高見：環境問題もたくさんありますが、特に深刻だと感じておられるのは？

明日香：日本から見た中国の環境問題は大気汚染、越境酸性雨というイメージですが、実際に中国に行くと感じるのは水、それにつながる砂漠、同時に木が少ないという問題でしょう。もちろん、大気も問題です。私は地球温暖化問題も専門のひとつですが、温暖化の根本的な問題は石炭利用であり、中国の石炭利用は温暖



明日香壽川さん

高見：一方で、99年に全国生態環境建設計画がでて、いまでも植林熱がすごい。苗木の値段が非常に高くなるなど、大きな転換がはじまりました。

それ以上に中国が環境問題に熱心だと言えるのは、人口抑制がすごい。ある意味では中国政府がとっている最大の環境政策だと思います。

明日香：世界は中国の人口政策に感謝すべきだと言う人がいます。私も同感だし、中国の人も、大部分の人が中国の産児制限は世界の環境保全に貢献していると思っています。しかし日本では、そういう認識はほとんどないようですね。

高見：大同の農村では、子どもは3~4人が普通です。2人目から罰金がかかりますが、とれるものならとってみると。家を継ぐのは男の子という観念の問題もありますが、実際問題としてあの広い畑を、人と家畜だけで耕す。天秤棒で何kmも水を担ぐ。男手がないとやっていけません。いくら政策でしぼりあげても、どうにもならない。ある程度余裕がでてこない無理でしょう。

これからは、沿海との格差の是正も考えないといけない。日本の中国に対する経済協力も、ほとんどが都市のインフラ整備だったのを、大きく変えないといけないと感じます。

明日香：いまの日中関係を反映してか、日本の対中ODAは減る方向にありますが、環境ODAの割合は増えています。対中ODAのなかの環境部門の割合は8~9割です。ただし環境といっても、地下鉄やモノレール、水力発電所など、みなさんがイメージする環境対策には必ずしも直接つながらないようなものが、金額的には少なからぬ部分を占めているのが事実だと思います。

日本の対中ODAは9割ぐらいが借款です。ですから中国の方は、金利は低いけど返すんだから、日本にとっては投資じゃないかと思っている人が多い。一方、多くの日本人はそれを全部無償だと思っている。本当は誤解をとり、日本は中国に対してどういう援助をしないとけないか考えるべきだと思います。けれど、それ以前のいろんな誤解のもとに、かつ、中国の環境問題は日本の環境にも越境酸性雨や黄砂で影響するから、というようにある意味で単純な発想で話が進んでいるのが日中関係、そして対中環境ODAの問題点だと思っています。

高見：日本では対中ODAの評判が悪い。なかでも、「感謝が足りない」という不満

が大きい。じゃあ、感謝してほしいってするのか、なんてことになりまして、逆効果にもなりかねない。NGOに対する補助・助成にまで、そういう要求ができて、やっかいなところがありますね。私たちにあって、地元の人たちといっしょにいちばんいいことを、現場で追及するのが大事だと思うんですけど。

明日香：中国の人とつきつめて話をしていくと、戦争の話になります。それも、日清戦争からですね。日清戦争のときに、中国が日本に賠償金をかなり払った。当時中国は非常に混乱していましたが、払ったことで混乱の度合いは増したでしょう。その後、満州事変、日中戦争とつづきます。

一方では、中国の若い人はそのあたりは考えていないという気がします。若い人は中国に自信をもってきて、いまさらそんなことはない、もう日本なんて眼中にないという感覚からそういう発言をしなくなる可能性もある。どちらにせよ、日本としてはもうすこしきちんとしたほうが良いと思うんですが、そう言うとき差障りがある場合が多いですね。

高見：日清戦争の賠償金は税収の3倍ほどだったそうです。それを返すために欧米に鉄道敷設権を売った。日清戦争がなかったら、中国はあそこまで切り刻まれて半植民地の状態になることはなかったんだと。

戦争問題というときは、日清戦争までさかのぼるのが、普通の中国の人たちの歴史認識だと、私たちは知っておくべきです。

日中関係は確かに最近いい状態ではない。ですが、ぶつかり合うのはわるいことではないし、お互い思っていることを率直に言い合うほうが良いと思います。ただ、相手に対する無知の上になりたつ罵詈雑言は困りますけどね。

明日香：知ってさえいれば良いとは思いませんが、コミュニケーションするにはある程度知ることが必要です。たとえば謝罪問題。日本はもう何回も謝罪している、何回謝罪すればいいんだと言う日本人が多いですね。では、日本はいつどのように謝罪したのか、少なくとも政府が公式的に言っているのはなにか、みなさんご存じですか。

溝口雄三さんという方が『しにか』という雑誌に書かれたのですが、政府が公式に謝罪と発表しているのは、95年の8月15日、当時の村山首相が閣議で決定したものを記者会見で発表したんです。日

本の人にはアジアに対してしている悪いことをしたと。それが、基本的に日本の外務省が言う「謝罪」

です。一方、2000年に朱鎔基が日本に来たときに、私は謝罪をもとめに来たわけではない、しかし日本政府は文書で公式に中国に対する謝罪はまだしていないと言いました。95年の談話は文書ではないし、日本の外務省は文書にする気はないと言っています。ですが、イギリスに対しては、日本は謝罪の文書を出しました。イギリスに出して、どうして中国に出さないんだと、中国の人は思っている。だいいち、日本の記者会見での発表が、中国に対して正式に謝罪したことになるでしょうか。かつ、中国側では人民日報に小さくのっただけで、中国の人たちには全然伝わっていないのです。そういう意味では、この問題は20世紀に解決できずに、21世紀に残された問題だと思います。

高見：ちょっと話題を変えて、ODAのここにいきましょか。
明日香：環境ODAはどんどん増えています。その8割ぐらいが、モノレールや、地下鉄や、水力発電所をつくる円借款で、残りでちょこっと植林をしたり、というのが対中ODAの現状です。ODAに限らず、日本と中国がどう協力すればいいのかわからない問題ですが、脱硫装置の例をあげて話をしたいと思います。

大気汚染の問題のひとつが、発電所から出る煙の中に硫黄酸化物が含まれていて、その煙を吸って喘息になる、ひどくなると死ぬこともあるというものです。日本では70年代に大問題になって、発電所に脱硫装置がつけられました。その脱硫装置の技術を、日本から中国に移転すれば解決するというのが一般的な考え方ですね。ところが、そう簡単な話ではありません。日本の場合は大きな発電所があって、そこに脱硫装置をつければある程度SO_xの排出を減らすことができた。脱硫装置は数十億円かかるものであり、

日本の場合、政府が補助金を出しました。いまの排出量は1960～70年代の10分の1くらいです。

中国の場合は、石炭をつかう小さなボイラーがたくさんあります。日本より3桁か4桁ぐらい大きな数の、小さなボイラーに使える脱硫装置が必要なんです。日本の経験がつかえるような状況ではありません。

さらに、日本の脱硫装置は湿式で水をたくさんつかいます。ですが、中国は水

がないので乾式です。日本には乾式脱硫装置の技術の蓄積がない。ですから、一概に技術移転と言っても日本の技術を移転すればいいということではなく、そういう意味からも中国の環境問題は一筋縄ではいかない状況だと思います。

水の問題ですが、中国は本当に深刻な状況で、半分冗談、半分本気に、北京を遷都しなくては行けないと、そういうことが議論されています。実際地下水がどんどんなくなって、地盤沈下がかなりの

規模で起きているという話も聞きます。

配管の水漏れの問題もあります。中国のトイレの配管で漏れている水の1%を節約できれば600万人に人に対して1年分の水を供給できるといいます。つまり、雨が少ないなど自然条件でもともと少ないのに、浪費もしている。その浪費も、水道管を全部直すのは大変なインフラ整備をしないと行けないので、一朝一夕に改善できる問題ではないと思います。

(2002年6月22日)

第8回会員総会報告

6月22日、大阪市立弁天町市民学習センターにて、緑の地球ネットワーク第8回会員総会が開催されました。

会員総数646名(団体を含む)のうち、出席48名、書面による決議への参加226名、委任状提出者70名、合計344名で総会が成立しました。

2001年度事業・決算・監査報告とその承認、2002年度事業計画・予算の承認、事務所移転にともなう定款の変更の承認、新役員の選出・承認がおこなわれました。

新役員は次のとおりです。

代表 立花吉茂

副代表 西山五郎 / 有元幹明

事務局長 高見邦雄

会計 太田房子

世話人 竹中隆 / 前川宏 / 向川郁郎 / 干場革治 / 小畑勝裕 / 川島和義 / 巽良生 / 上田信 / 深尾葉子 / 山永ユカリ / 東川貴子 / 長坂健司 / 宮崎いづみ

監査 松橋二郎 / 早草晋

顧問 石原忠一 / 小川房人 / 遠田宏



ごく一部ですが、総会によせられた会員からのメッセージをご紹介します。

中国北西で大洪水とか。大同周辺はど

うなのかな。今年の春は現地を見られず、残念。また、行きます。

大同は水害が出るほどではないけれど、雨が多く、植えた木の活着もよいそうです。

関東地区での会合はないのですか？

下の欄、および次ページをごらんください。

先日「カササギの森」の写真報告を頂きました。順調に進んでいることに安堵しています。今後も見守ってゆき、できれば新たな協力もと考えています。送っていただいた報告を見ての感想です。「これなら、わざわざ紙でもらわなくても、GENのホームページに載せてもらえれば良いな。」と、思いました。ああっ、HPも更新しなくては！ もう少しお待ちください.....。

関東ランチ自然観察会

藤井 皓基 (2001春フォーキングツアー参加)

5月の例会は初めての試みとして、武蔵小金井市の野川公園で、自然観察会をおこないました。

今年は雨が非常に少ないのに当日(5月18日)の予報は雨でした。幸いなことに早々に雨が上がり大変ラッキーでした。

新緑の中、総勢11名の参加者は武蔵小金井市の「野川公園自然観察園」で樹木の観察会をおこないました。



植物図鑑を見ながら木の名前を確認

まず「この木なんの木」30種類の木の名前を当てながらコースを散策しました。通常公園の木はけやき、桜、銀杏と街路樹が多いのですが、どっこい自然に生えた木が多くさっぱりわかりません。公園内には「ほたるの里」もあり、池にはかがるがもの親子(ひな10羽)が可愛らしく泳いでいたりして自然を満喫しました。1回目は自分で観察しながら、解答をメモしました。次に、「牧野日本植物図鑑」の写しを読みながら、再度全員で同じコースをまわりました。正解はよくできた人で3分の1程度でした。自然の中の樹木はよく見かけても、名前を知らない木が多いことがわかりました。松永さんから野川の地形についての説明がありました。

「10～5万年前、古多摩川の氾濫源が隆起して武蔵野段丘が形成、3～2万年前に形成された立川段丘との境に約20mほどの国分寺崖線と呼ばれる崖地が出来た。

ここに湧き水があり、地元の人にハケと呼ばれている。武蔵野段丘に降り注いだ雨が地下に浸透し湧き出した湧き水が寄ってきた流れが野川、だそうです。

その野川の河川(岸)を約3キロさかのぼり、上田先生宅へうかがいカレーパーティとあいなりました。2種類のカレーは本格的なもので、スパイス類も20種類ぐらいはいつているのでは？参加者全員、心地よい空腹のなかで大変おいしく楽しくいただきました。GENの関東ランチの参加者、特に若い人の健康的な会話のなかでのつどいは小生62歳も楽しく参加させてもらっています。今回は上田先生ご一家に感謝。

助成が決まりました

中国山西省大同市の緑化協力に対して、下記の助成が決まりました。

郵政事業庁国際ボランティア貯金
4,486,000円

環境事業団地球環境基金(内定)
3,000,000円

なぜ植物標本か？

GEN自然と親しむ会報告

高木 小枝 (2001夏ワーキングツアー参加)

6月9日、大阪市大附属植物園で、植生調査入門その2～標本づくりがおこなわれました。中学生もふくめて30人あまりが参加。にぎやかに標本づくりに取り組みました。

かつてプラントハンターが活躍していた頃のキュー植物園の標本をTVで見たことがある。学術研究のための過去の手法かと思っていたが、現在でも標本作りがおこなわれていると知り、“活きた手法”を体験すべく参加した。

標本にする植物を探し、採集する。

花や実など特徴のあるものを探すので楽しい。花のついたタイサンボク、アジサイの他、シダ、ツルなどを採取（B4の大きさに収まるようにカット これが難しい）

生育する環境観察&メモをとる。

植物の特徴（樹高など）や周辺環境など気付いたことを書き留める。

レイアウト。

葉（葉裏も）や花、実の特徴がわかるように、かつ見栄えよくレイアウトする

（こんもりしている時は間引く 考え込んでしまう）

乾燥。

新聞紙で押して乾燥する（カビないように2日間は朝晩2回新聞を取り替える地道な作業）

仕上げ（各自）

乾いたら標本を台紙に貼り、名称や採集場所などのデータを添えて完成。

さて体験後に再度問う。なぜ植物標本か？

写真やスケッチでもいいはずである。雰囲気や色を伝えるならこれらの方が得意だろう。でも細かなところを見るにはやっぱり実物（＝標本）が一番だ。私たちが作る標本は、植物園に保存するような大層なものではないけれど、その作成過程では発見することが多い。どこでも



採ってきた植物を新聞紙にはさむ

何でも採集できるわけではないので、そのあたりの配慮は必要だが、植物を深く知るのに標本作成はプロ、アマ問わず有効な方法だと思った。

最後に、標本作りのノウハウや失敗談を興味深く教えてくださった岡田博先生や陽気な参加者の方々、企画していただいたスタッフのみなさん、楽しい時間をありがとうございました。

カンパのお願い

夏のボーナスカンパの時期がやってきました。

GENの運営は、みなさんからの会費やカンパで支えられています。緑化協力には助成金ができますが、国内の運営費にはありません。緑化協力費も十分とはいえない状態がつづいています。カササギの森、緑化基金、運営カンパ、どれでもけっこうです。みなさんのご協力をお願いします。

なお、作業の都合上一律に振替用紙を同封しますが、最近ご協力をいただいた方には重ねてのお願いではありませんのでご了承ください。

受賞報告

～おおさか環境賞～

豊かな環境づくり大阪府民会議（会長・太田房江大阪府知事）の「おおさか環境賞」の「大賞」に、緑の地球ネットワークが選ばれ、6月11日に表彰式がありました。「植樹などの積極的な活動やその実績とともに、ここ大阪から活動を発信し、全国、世界へと活動を拡大」していることが評価されました。国際ソロプチミスト大阪の推薦をいただきました。

～母なる河を守る行動
国際協力賞～

中国共産主義青年団中央委員会、中華全国青年連合会が主催する「中日青年環境保全協力論壇」（4月13日～15日、北京）で、他の団体といっしょに、「母なる河を守る行動国際協力賞」を受賞しました。大同における緑化協力の経験を報告し、注目されました。胡錦濤国家副主席の会見もありました。

写真展予告

中国黄土高原

～砂漠化する大地と人びと
秋の広島、岡山で開催

昨年、京都、名古屋、大阪で開催してたくさんの方にご協力・ご来場いただいた橋本紘二さんの写真展、『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』を、今年もJR西日本のご協力で開催することになりました。会場付近にお住まいの会員の方は、ぜひお手伝い・ご来場ください。

【広島会場】

場所：JR広島駅

期間：9月20日（金）～26日（木）

【岡山会場】

場所：JR岡山駅

期間：10月初旬の予定

関東ランチから
人形劇シナリオ
大募集！

GEN関東ランチでは、黄土高原での交流会や日本でのイベントにおいて、人形劇をおこなってきました。現在「虎の威を借る狐」しか演目がないので、新しいシナリオを広く募集します。下記の要点を満たす作品を、ぜひお送りください。

1. 緑の地球ネットワークの「原点」（ホームページ参照）に反しないこと。
2. 上演時間5分程度で、5～7名以内のメンバーで演じられること。
台本は日本語で結構です。
初演は、今年10月の関東でのイベント。さらに来年春のワーキングツアーで、中国語版を上演する予定。

審査委員長は、ロンドン大学大学院で演劇を学んでいる近藤春菜さん。

採用作品には、上田信の近刊『トラが語る中国史』と『森と緑の中国史』を贈呈します（著者サイン付きにもなります）。

締切：8月末日

送り先（関東ランチ連絡先）：

〒171-8501 豊島区西池袋3-34-1 立教大学文学部 上田信 e-mail : ueda@rikkyo.ac.jp

住所・氏名・電話番号を忘れずに。

中国環境NGO緑化ツアー参加記

村松 弘一 (西北大学高級研究員・国際交流基金アジアセンター
次世代リーダーフェローシップフェロー)

近年、中国で中国人による環境NGOが活動をはじめています。北京に拠点をおく団体はいくつかありますが、なかでも「緑家園志願者」(志願者とはボランティアの意)は中央人民広播電台(ラジオ局)の汪永農さんが代表をつとめるNGOで、エコツアーやイベントをつうじて中国の環境問題全般を社会に広める活動をしています(事務局長は張玲さん)。この春、このNGOが山西省と四川省で2回にわたり緑化ツアーを企画し、西安に住んでいる私も参加しました。

【山西省壺口瀑布緑化ツアー】

壺口瀑布(瀑布は滝の意)は黄河が北から南へと流れる途中、山西省と陝西省の省境に位置します。ツアーは4月6日・



徳陽市植林現場にて

7日の1泊2日でおこなわれ、中国人のほか日本・フランス・キューバなどの留学生を含めて40人ほどが参加しました。まず、山西省臨汾市からバスに5時間乗り、抗日戦争中に山西省政府が置かれていた吉県克難坡という村で1時間ほど栗を植樹しました。その日はこの村の農家に1泊させてもらい、食事もごちそうになりました。献立に肉はなく、普段の料理を出してもらったと思います。次の朝、黄河のほとりて1時間ほど作業。河岸は岩盤だらけで、穴を掘るのに結構苦勞しました。その後、壺口瀑布を見学。この滝は中国人なら誰でも知っている名所で、まさに黄河を飲みこむ岩の穴といった感じでした。その激しい流れのために侵蝕が進み、1500年で5km上流に位置が動いたとも言われています。

【四川省徳陽市緑化ツアー】

徳陽市は四川省の省都・成都のすぐ北に位置する都市です。このツアーは市主催の緑化事業に緑家園と北京環境ボランティアネットワーク(日本人と中国人によるNGO)の2団体が参加するというものでした。期間は5月3日から5日まで、

中国も日本と同じくゴールデンウィーク中でした。全体の参加者は80名で、私以外はすべて北京から参加しました(日本人は6名)。作業は1日目の午前中、40分ほどの1回のみ。土は赤色をしていて、黄土高原とは明らかに違います。植えたのはイチヨウ。後からわかったのですが、実はイチヨウの葉から葉やお酒(銀杏酒)を造ったりする会社が緑化に協力していたのです。ここの植林は経済的な要求が大きくかかっているようです。作業のほかには、三星堆遺跡・臥龍パンダ保護区・都江堰(2000年前につくられたダム)を見学しました。臥龍では100元はらって本物のパンダと写真をとりました。

【緑化ツアーの印象】

観光地に行くついでに植林もする。GENのツアーと比較してそんな印象を持ちました。このNGOが一地域の緑化を継続的に行っているわけではないのじゃないかとは思いますが……。ともあれ、政府主催ではなく、こういったNGOのボランティアツアーに北京の市民が80人も自費で参加するということは驚きです。環境問題に対する関心が広まったことのあるわけではなんでしょうか。今後も中国のNGOから目が離せません。

今回紹介した緑化ツアーの活動の詳細は下記HPをご覧ください。

<http://homepage2.nifty.com/cunsong/index.html>

黄土高原に行つて気づいたこと

福田 愛(リコー三愛サービス(株)クリエイティブ事業部)

春の黄土高原ツアー報告の締めとして、4/24~29におこなわれた(株)リコー社会環境本部のツアーの参加者から手記を寄せていただきました。福田さんの愛称(?)はフーテンの愛。「福田」の中国語読み「フーティエン」からGENの遠田顧問が命名したとか。

びっくり現地にて

<熱烈歓迎>

でこぼこ道をバスで揺られ、やっと目的地に着くとどこからか太鼓の音が。鼓笛隊!? バスから降りてさらにびっくり。真っ赤な『熱烈歓迎理光緑化協力団』の横断幕!まさに『熱烈歓迎』にとっても嬉しかったけれど、少々照れてしまった。

<子どもたちの笑顔>

とっても澄んでいて、余計なものがないもなく、キラキラ光る子どもたちの目。みんな素朴で明るく力強い目をしていた。

<土の感触>

カサカサ。手が荒れてしまう。日本の土とはまったく違う。場所によっても感触が違う。ちょっとサラサラしているところもある。カササギの森は石ころが多

かったけれど、感触がやわらかく、とても気持ちよかった。そこでミミズを発見! ホッと一安心。

<知らなかったこと>

木を次から次へと植えていけばいいのだと思っていた。けれど、植えた後の方がよほど大変だとは……。知らなかった。

<知らなかったこと>

日本と中国の関係について、あまりにも無知だった。聖徳太子も、徳川家康も、世界大戦も遠い昔のこと。歴史という本の中でできごとだと思っていた。そう、日本と中国の戦争はとても近い過去だった。中国の人たちの感情を考えたことがいままでなかった。

帰国後の目

帰国後、いままで当然だと思っていた



参加者の1人、西條さんが描いたスケッチものが疑わしい。

公園の緑は日増しに濃くなり、花は季節をまちがえることなく咲き誇る。雨が滝のように降り注ぎ、雷が鳴り響く。

黄色い大地が脳裏をかすめる。

食器はきれいに磨かれ、トイレは水で洗浄される。サラリーマンのファーストフードの朝食、ポリバケツからあふれた生ゴミに群がるカラスたち。

とくに何も感じず当たり前だったものが、とてもぜいたくで、恵まれていることだと気づかされる。こんなことはツアーに参加しなければ、考えもしなかったはず。忘れがちだけれど、大切なこと。

6日間しか滞在し(次ページにつづく)

植物を育てる (17)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

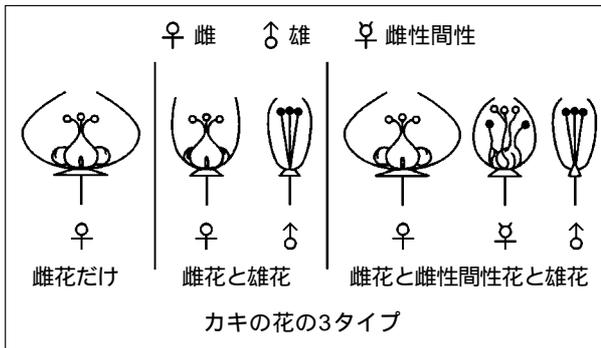
種の多様性

前号で種の多様性を作り出す植物の巧妙な作戦のうち、雌雄異熟や異型薬について書いた。今回は雌花・雄花や間性花、退化オシベなどをもつ植物に登場願うことにした。

花の雌雄

人間のように雌雄が別々の植物を雌雄異株といい、一株の中に雌花雄花が混在するものを雌雄異花という。また一花中に雌雄があるものが完全花で、これが一番多い。完全花は両性花ともいう。両性花はいいが完全花というのは、前号で述べたような雌雄異熟などあって決して完全とは思えない。このほかに間性花がある。雌とも雄とも言い難い花で、細かく観察すると雌性間性花と雄性間性花とがみられる。ホウレンソウのようにもともと雌雄異株だが、雌性間性株と雄性間性株をもつものもある。

雌性間性花
この花は通常は雌花と



カキの花の3タイプ

思われているが、花をよく観察すると退化した雄花の痕跡が残っており、まれには花粉の出る場合がある。その花粉が生きていれば受精能力がでてくるわけだが、無能花粉の場合もある。

シナヒラギモチという植物はわが国には雌株しか渡来していないにもかかわらず、結実して発芽する種子をわずかながら産出するので不審に思っ調べてたら、まれに有能花粉ができることがわかった。

柿には800もの品種があるが、一般の品種は雌花だけをもつものが多い。しかし、野生のヤマガキ(山柿)は、両方ともつ株が多く、まれに雄花だけしかもたない株も見られる。面白いことに雌雄の花をもち、間性花もあわせもつ株があって、さらに雄性間性花と雌性間性花とがあり(図)、雌花には大きい果実が実り、雌性間性花が小さい実をつけ、大小2つならんで結実するので夫婦柿と呼ばれるものがある。雌性間性花の果実は種子が発芽しないが、雌の果実の種子は発芽して変化のある子孫を残した。これも進化と多様性からんだ現象と思われる。

黄土高原史話 <8>

黄土高原にとってヒツジとは

谷口 義介 (摂南大学教授)

GENでは1998年、太行山脈の麓に霊丘自然植物園を建設。

総面積86ha、標高900~1300mと、高低差あり地形の変化に恵まれ、植物園にはまさにうってつけ。苗木づくりや果樹栽培、寒さと乾燥に強い外来樹種を実験的に導入していますが、その際、最もやっかいなのはヤギやヒツジの放牧。緑のない季節には、苗はもとより成木の樹皮までかじってしまうからです。そのため、近隣の村とも話を通し、侵入防止用に棘のある灌木を柵代わりに植えて囲っています。家畜の食害がなくなると、植物は徐々に本来の姿を取り戻し、黄土高原の緑化の筋道も迎れるというわけ。

ワーキング・ツアーで数回訪れましたが、年ごとに緑が厚くなってゆくのを実感。植樹作業にも力が入ります。

このように緑化にとっては憎っき敵でも、黄土高原(北部)の人々には、ヒツジやヤギ(特にヒツジ)は歴史的に恩恵を蒙った動物でした。

B.C.6500年頃、西アジアの北半部分で家畜化されたヒツジは、B.C.3000年前後、ムギと共に入ってきたようです。新石器時代後期の龍山文化段階(B.C.2600~1900)で本格的な飼育が始まりますが、黄河流域の陝西・山西・河南各省よりもむしろ甘粛やモンゴル高原で卓越するのは、草原が広がる生態的環境に適応したためか。甘粛から内蒙古、黄土高原の北部にかけては、アワやキビに比べ耐乾性の劣るムギの栽培よりは、ヒツジの飼育の方が受け入れやすかったのでしょう。

殷代(B.C.1600~1055)甲骨文には羌姓の牧羊族を捕えて犠牲として供える記

事が散見しますが、それは黄河周辺の丘陵地までヒツジの牧畜民が南下していたことを示します。

牧畜専業でない一般の農耕集落でも、ヒツジは飼われていました。

春秋時代(B.C.722~481)初期、洛陽近郊の農村を舞台とした『詩経』王風・君子于役の歌(第一章)

君子 役にゆく、その期を知らず。

いつか至らんや。鶏はねぐらに棲み、日の夕べ、羊・牛は下り来たる。

君子 役にゆく、如何ぞ思うことなからんや。

“日暮れどき、ニワトリはねぐらに、ヒツジやウシも丘の辺から戻ってくるが、夫は役に駆り出されたまま、いつ帰るともわからない”。この詩から、黄土高原南端の農村でも、ウシやニワトリと共に、ヒツジが普通に飼われていたことがわかります。



(前ページからつづく) ていなかったので、実際の難しい問題、障害、苦労は感じきれなかったかもしれません。けれど、私のももの見方が少し変わった気がします。

あまりにもかけ離れた世界だったので、夢だったのか、実際に経験したことだったのか、よくわかりません。数年後また見に行くことで、確かめたいと思います。



GEC10周年記念事業
地球温暖化CDMフォーラム
2002

【大阪会場】

日時：7月23日（火）13時30分～17時
場所：ヴィアール大阪2階「安土」

【東京会場】

日時：7月26日（金）13時30分～17時
場所：労働スクエア東京 ホール

【両会場共通】

主催：環境省・（財）地球環境センター
参加料：無料

<プログラム>

- ・講演1：「地球温暖化問題に関する最近の国内・国際動向」（環境省）
- ・2001年度調査団体による調査報告（7事例）
- ・講演2：「フィージビリティ調査結果のまとめとプロジェクト具体化に向けた課題」平石尹彦氏（（財）地球環境戦略研究機関理事）

申込み締切：7月19日（金）必着
問合せ・申込み：（財）地球環境センター「地球温暖化フォーラム」係（〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2-110 TEL. 06-6915-4121 FAX. 06-6915-

0181 e-mail : gec-cdm@unep.or.jp
URL http://www.unep.or.jp/gec/
お名前・所属・ご住所・電話番号・FAX番号・希望会場を明記してお申し込みください。

森林と海：連鎖への回帰
瀬戸内海研究フォーラム
in わかやま

物質循環、リモートセンシングや熊野古道の歴史文化などをふまえて、環境保全にはたす森林と海の関係論を論じます。

日時：8月29日（木）13時～18時30分、30日（金）9時30分～16時
場所：アパローム紀の国「孔雀」（TEL. 073-436-1200 和歌山市湊通丁北2-1-2）
参加費：無料（懇親会5,000円）
主催・問合せ・申込み：瀬戸内海研究会議（〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-1 国際健康開発センター3階（社）瀬戸内海瀬戸内海環境保全協会内 瀬戸内海研究会議事務局 TEL. 078-241-7720 FAX. 078-241-7730 e-mail : web@seto.or.jp

内容

【29日】

- 第1セッション 和歌山の海の生態系を支える陸唐戸海からの栄養補給
- 第2セッション リモートセンシングの利用と海域生態系

【30日】

- 第3セッション 海からみた熊野 - 紀伊半島の歴史・文化 -
 - 第4セッション パネルディスカッション：森林と海
- 申込み：8月15日までに氏名・所属・住所・電話番号を明記して郵送・FAX・eメールで瀬戸内海研究会議事務局まで

編集後記

猛暑の夏を予感させる暑さのなか、この2週間ほどのあいだに、訃報が2件あいついで届きました。

松本正之さんは中国が大好きで、ワーキングツアーに、96年から2000年まで毎春夏、全部で10回参加されました。農村のおじさんやおばさんと親しく交流を深めておられました。定年退職と相前後して体調をくずされ、しばらくはツアーにも参加しておられませんでした。

松本忠雄さんは春に4回、ツアーに参加されました。お酒好きで陽気な正之さんに対してものしづかな方でしたが、回を重ねるうちに、中国語の勉強を始めたたり、中国への親しみをましておられたようです。2000年春のツアーが最後で、01年に闘病中とのご連絡をいただき、再びお目にかかることなく他界されました。

あの世があるなら、いまごろ思いがけない再会に2人して話はずんずんしているかもしれません。ご冥福をお祈りします。

（東川）